

「造れば売れる時代」だった。つい二、三カ月ほど前までは。「生産能力に応じてシェアが決まる」とも言われた経営環境は、今や一変。金融危機に伴う景気低迷、メーカーの相次ぐ減産によって、局面は生き残りをかけた正念場へと転じた。

建設機械メーカー大手、コマツの子会社を束ねる。事業は溶接ロボットシステムの商品化、試験機の開発、建設機械などの設計受託が柱だ。

東大大学院修士課程を修了後の一九七二年、コマツに入社。同社の技術研究所(神奈川県平塚市)で、海洋開発に向けたプロジェクトに参加。橋りょう建設や海底ケーブルの埋設といった工事に欠

コマツエンジニアリング
社長

成瀬 俊久さん



なるせ・としひささん 甲府市出身。甲府一高一東大工学部一東大大学院修士課程修了。1972年コマツ入社。営業本部副本部長、コマツエンジニアリング副社長などを経て、2006年から現職。神奈川県平塚市在住。61歳。

たのは中学時代。自宅近くに住んでいた教育実習生の下宿にもぐり込み、ステレオやラジオの組み立て方を教えてもらったのが原点

いる。コマツエンジニアリングの社長に就任後、「耐震構造の企業体質」を目指し、「ものづくり力」のレベルアップや協力企業との連携強化を図ってきた。景気低迷という「激震」が走る今、その真価が問われている。生産合理化や環境対策につながる商品をアピールし、新たな需要の喚起、深掘りを目指す。

故郷発の「指針」が支え

かせない、電気制御の水場を訪ねて国内各地に出た。学生生活を通じて「電中フルドーザーや海底の掘削機などを開発した。向いた日々。「頭の中にあったのは『世の中にならぬ山に囲まれた地域に育ち、海への漠然としたあう思い。海に入り、自分こがれがあった。潜水士の目や手で確認したこと。国家資格を取得して海をもとに、開発の構想を練った」

科学への興味が芽生え、役員との懇親会で熱弁をふるったのを覚えて

約三百人の社員が共有する合言葉は「しなやか」に「したたかに」「すばやく」「たくましく」「へこたれず」。「言葉の趣旨は、武田信玄の『風林火山』と共通するところがあるんですよ。難局を乗り切る指針は、ふるさとにある。

〈保阪 有〉

東京発
元気甲州人